

福 井 県 医 師 会

だより

第676号 平成29年(2017)10月



西山公園（上段の庭）の秋

鯖江市 清水 元博

表紙写真説明：西山公園（上段の庭）の秋

鯖江市 清水 元博

西山公園は、今から約150年前（安政年間）、鯖江藩7代目藩主間部詮勝公によって造成された庭園「嚮陽溪」が起源となっています。「嚮陽」とは、自然に親しみ、陽に嚮って、常に明るく、いつも隣人を愛するという意味で、詮勝公の庭園に対する思いが偲ばれます。

当時、諸大名が万金を投じて意匠を凝らした大規模な庭園を造る中、領民とともに楽しみたいと自ら陣頭に立ち庭園を築いたもので、このような事例は「嚮陽溪」と「水戸偕楽園」のみです。

撮影当日は、晴天でやや逆光気味でしたが、光に映える紅葉と池にたたずむ東屋の光景を撮影しました。

醫 縫 録

医療の原風景

公立丹南病院長 布施田 哲也



平成29年4月より公立丹南病院の病院長を拝命しました布施田です。医師会の先生方との連携を密にして和を乱さず丹南地域の医療の円滑な推進に尽力していきます。私は昭和36年に福井市佐佳枝上町（今の中央1丁目）で生まれました。子供のころは病弱でいろんな医療機関にお世話になりました。近所で一番思い出に残っている医院は、柳下医院です。電車通りの向こうの浜町（中央3丁目）にあった医院で、きれいな庭園に和洋折衷風の建物、中に入るとクレゾールの匂いにつつまれ、診察室の戸棚の上には、いろんな臓器のホルマリン漬けの標本が数多く置いてありました。興味津々の布施田少年は、診察室に先生が来るまで食い入るように見ていました。

済生会病院にもお世話になりました。熱が出るとひきつける感じになったそうで親は大変心配し、親父におんぶされて月夜の道を済生会に向かったことは覚えています。看護婦さんが、「先生が来てくれますからね」といってくれて、親も優しいし、妙にうれしく元気になってはしゃいでいたら、母に「先生が来たら、つらそうにしないといけませんよ」と注意を受けたことを思い出します。皆さん、やさしく対応してくれました。

小学生になった頃、済生会で弟が生まれたので毎日見舞いにいきました。中央2丁目にあった旧済生会病院、狭い廊下に大勢の患者さん、正面のエレベーターには、鉄格子の内扉がありました。このエレベーターが大好きで、利用者がいると脇に滑りこませてもらって上がったり下がったりしていました。「何しているの」と聞かれても「弟が生まれました」といえば誰からも注意を受けることなく、「おめでとう」と言われ牧歌的な雰囲気でした。こういった話を、登谷済生会病院長に先日お話ししたところ、朝の検温前に三国から来た行商のおばさんが各病室に魚を売りに来ていて術後の患者さんから「朝早くからうるさい」と言われた話を聞きました。医療と生活が一体化していた

雰囲気が昭和40年代にはありました。

月日は流れ昭和61年に自治医科大学を卒業し、初期研修後の卒後3年目には嶺南の上中病院に赴任しました。小浜医師会に入会させていただき、役場の人と会長先生宅にご挨拶に伺いました。当時の吉井達郎会長先生は80歳近かったのではないのでしょうか。歴史の重みを感じさせる吉井医院には、そう柳下医院と同じ匂いがありました。会長先生からは笑顔で「まあがんばりなさい」とお声掛けいただきありがたかったです。その後、丹生郡医師会、鯖江市医師会にお世話になり、昔話を懇親会の席で聞くことを楽しみにしております。丹生郡医師会では、馬に乗って往診していた話、往診先で髄液検査をした話、輸血が西田中まで電車で運ばれてきた話を聞きました。丹生郡医師会に入会した頃は、旧清水町小羽の荻原越郎先生が90歳近くで現役とお聞きしてご挨拶に伺いました。先生は縁側でくつろいでおられ、家の一室が診察室のようで、「もう患者は断っているのだが、どうしてもといわれると診察して薬を出している」とのことでした。レセプト提出もしてないと言っておられました。鯖江市医師会の今野利男先生からは、いろんな分野の興味ある経験談をお聞きすることができ、「年に一つは新しいことを経験する」という人生に対する粹な教示をうけ、私も毎年実践しているところです。

百年後には今回のエピソードすべてが歴史の中に埋もれます。ここまで育てていただいた先生方への感謝も込めて私の医療の原風景を紹介させていただきました。病気に悩む人々がよりよく生きる、そのお手伝いとして医療はあると思います。地域にとって必要とされる病院であり続けたいと考えていますので、今後ともよろしくご指導ください。